

『人生100』

小山 正太

## あらすじ

週刊少年ジャックの編集部で働く灰原洋二郎は苦悩していた。担当している漫画家、暗木狂四郎先生は根性無し。締め切りを守らないばかりか、連載を辞めたい、死にたい、と愚痴ばかり言ってくる。

本当は灰原自身も辞めたい。編集者になるため、良い大学も出たし、倍率数百倍の採用試験も合格した。だからこそ辞めるなんて言えないし、執筆を嫌がる暗木先生の尻を叩くばかりの毎日に虚しさを感じていた。

精神的に追い詰められた灰原は、とある禁忌を犯して自分を保つようになる。それは『先生ごっこ』。灰原は暗木先生を名乗り、演じ、ガールズバーで出会ったマコと恋愛するのであった。いけないと分かりながら、バレたらクビになるかもしれないスリリングな恋愛に灰原は没頭する。

そんな中、暗木先生の漫画のアニメ化の話

が持ち上がる。密かにアニメ化を狙っていた暗木先生のヤル気は上がり、締め切りも守るようになる。願ってもない状況になったが、『先生ごっこ』が明るみになり、アニメ化が中止にならないかと、灰原は過剰に不安を覚えるようになる。

事が大きくならぬよう、灰原はマコに別れ話を切り出す。が、マコは首を縦に振らない。そればかりかアニメのヒロイン役に抜擢するように脅してくる。元々マコは声優であり、暗木の漫画のアニメ化を見越して媚びを売ってきたのであった。

今更になって会社をクビにされたくないと感じた灰原は、暗木に『先生ごっこ』をしていたことを打ち明ける。もちろん暗木は憤慨する。が、自分の尻を叩いてアニメ化まで導いてくれた灰原に感謝もしている。そして暗木は嫌々ながらもマコをヒロイン役に抜擢することで、灰原の起こしたトラブルを丸く

収めるのであった。

結果的に、苦悩していた頃の自分自身の努力に救われた灰原。首の皮一枚で職を失わずに済んだ彼は、四の五を言わず、暗木の担当を続ける覚悟が芽生えるのであった。

## 登場人物

灰原洋二郎（28）・・・人気漫画家、暗木狂四郎の担当編集。『先生ごっこ』という、暗木狂四郎を名乗り、演じ、恋愛する遊びで、行き場のないフラストレーションを晴らしている。

暗木狂四郎（28）・・・週刊少年ジャックの人気漫画『カメレオンファイター』の作者。少し暗い内容のため、アニメ化の声がかからないことからヤル気ダウン中。

マコ（真子田サトミ）（22）・・・ガールズバーでバイトをしながら声優をしている。カメレオンファイターがアニメ化された時、ヒロイン役に抜擢されるため、暗木狂四郎を名乗る灰原と恋仲になる。

軽井沢（34）・・・『ラブリーパンティ』という漫画の担当編集。灰原に対して、先生ごっこを教えた張本人。

金剛先生・・・ラブリーパンティの作者。本編に登場しない人物だが、軽井沢に女装させ、パンチラシーンのモデルにしている模様。

亀田レオン・・・カメレオンファイターの主人公。暗木が連載を辞めたいがため、何度も殺される不遇のヒーロー。

○ 講創社(出版社)・外観

青みがかったガラスばりのビル。

○ 同・週刊少年ジャック編集部

デスクについている灰原洋二郎(28)、  
胃薬を飲む。

軽井沢(34)が灰原の肩に手を置き

軽井沢「わかる。今日の五時だもんな、うん」

灰原「いいんです、怒られるのはどうせ僕な  
んですから」

軽井沢「そう腐るなって。暗木先生だって締  
め切り守ることもあるさ」

灰原「三回に一回は」

軽井沢「イチローだって打率3割。十分十分」

灰原「ビジネスマンの3割は死に値します」

軽井沢「相手は漫画家なんだし。暗木先生は  
描きやヒットなんだから忍耐、忍耐」

ケータイの着信音。着メロは森田童子の  
『僕たちの失敗』。

軽井沢「森田童子。暗いチョイスだな」

灰原、胃の辺りをさすりながら

灰原「(電話出て) はい、灰原です」

暗木の声「(声震わせ)今、Gペンを動脈に刺  
そうか迷ってます」

灰原「そんなこと言っても締め切り伸びませ  
んからね、暗木先生」

暗木の声「今度こそは刺せる自信あります」

灰原「自分の漫画に自信を持って下さい」

電話の向こうからボリボリと音がする。

### ○マンション・暗木の部屋・仕事場

イスの上に体育座りしている暗木狂四郎  
(28)。ポテトチップスを食べながら

暗木「死にたいです」

灰原の声「死んでもいいですから、油まみれ  
の手で原稿触らないでくださいよ」

暗木「ポテチ食べてない！ 死にたい！」

### ○講創社・週刊少年ジャック編集部

灰原「死にたい人間は食物連鎖の渦中にいま



せん」

暗木の声「死んで草花の栄養になります」

灰原「今日の五時ですからね」

暗木が「死に」と言いかけたところで、

灰原は電話をブチ切る。

軽井沢「ホントに死んだらどうすんだ」

灰原「その前に僕が死にそうです」

軽井沢『カメレオンファイター』掲載順位4

位なんだぞ」

灰原「どうしてあんな暗いのが人気なのか。

いいよなあ軽井沢さんは金剛先生の担当で」

軽井沢『ラブリーパンティ』なんてただのバ

ンチララブコメだよ」

灰原「締め切りを守るだけ良いじゃないです

か」

## ○ オムニバス・暗木の部屋の前

灰原、チャイムを鳴らす。が、反応無し。

何度も鳴らす。が、返事すら聞こえない。

ドアを開けてもカギがかかっている。

ポケットから合いカギを出し、開ける。

### ○ 同・暗木の部屋・仕事場

灰原が中に入ると、暗木がイスの上に体育座りをして震えている。

暗木「もう限界です」

灰原「頑張りましょう。漫画家、子供の頃からの夢だったんでしょ」

暗木「理想と違った」

灰原「どんな仕事もそんなもんです。ん？」  
机の上に原稿が。

灰原、パラパラめくると21枚ある。

灰原「できてるじゃないですか」

暗木「……」

灰原「読みますよ」

暗木「……」

灰原、一枚ずつめくってゆく。

『カメレオンファイター』は殴打や銃弾が飛び交うバトルマンガ。

灰原「いいですね、息を飲むバトル！」

一枚めくると、主人公の亀山レオンが銃弾でハチの巣になっている。

灰原「(嬉しそうに)さあ、どうなる!？」

最後のページ、白抜き文字で「完」と大きく書かれている。

灰原「はっ？」

暗木「僕の代わりに主人公が死にました」

灰原、額の汗を袖で拭う。

灰原「来週からどうするんですか」

暗木「だから、『完』です」

灰原、ベタ塗りで『完』を潰す。

暗木「何するんですか!？」

灰原「こっちのセリフですよ!」

灰原、真っ黒になったページに、ホワイトで点を散りばめてゆく。

暗木、灰原から原稿を奪おうとするが、

灰原は原稿を抱えて部屋から逃走。

## ○ 印刷所

印刷機で、少年ジャックが大量印刷。

○ マンション・暗木の部屋・仕事場(日かwatて)

灰原の前で、少年ジャックを読む暗木。

暗木「何たるや想像力……」

真っ黒の上に白点が散りばめられた最終

ページ。

「次号、宇宙編突入！」と、あおり文が

記載。言われて見れば銀河に見えなくも

ない。

暗木「宇宙……」

灰原「逃がしませんよ。宇宙の果てでも、地

獄の果てでも、どこまでも！」

○ タイトル

「人生ごっこ」

○ マンガ

宇宙人に首をハネられる亀山レオン。

あおり文「次号、地獄編突入！」

×

×

×

閻魔大王にハンマーで身体を潰される亀  
山レオン。

あおり文「次号、息子登場！ 引き継が  
れる意思編突入！」

× × ×

悪役に無惨に身体を切られるレオンの息  
子。

あおり文「平成のブラックジャックによ  
る強化オぺ開始！」

### ○ マンション・暗木の部屋・仕事場(日かわって)

目にクマができている灰原が息を切らせ

灰原「へへッ、地獄すら乗り越えましたよ」

目にクマができている暗木がジャックを  
めくる。

暗木「平成のブラックジャック……なぜ悪役  
が医者の設定にっ！？」

灰原「どんな手を使っても辞めさせません」

二人、ドサッと倒れる。

○ 講創社・少年ジャック編集部(日かわって)

突っ伏している灰原のデスクに、軽井沢が栄養ドリンクを置き

軽井沢「このままじゃお前が死ぬぞ」

灰原「それなら、『連載辞めさせていいぞ』って言うってください」

軽井沢「そんなこと言えないよ。残酷だなあ」

灰原「じゃあ担当代わって下さい」

軽井沢「オレ以外にもお願いしてみろよ」

灰原、編集部のスタッフ一人一人を睨みつけてゆく。

皆、目をそらし、仕事に没頭するふり。

軽井沢「お前にしかできない役目なんだって」

『僕たちの失敗』の着メロ。

灰原、むせび泣く。

○ 居酒屋(夜)

テーブル席に灰原と軽井沢。

テーブルには空のジョッキが15個ほど。

灰原「この前、逃げ出そうとした先生の首根

っこ掴んでやったんですよ」

軽井沢「実際に掴んだの？」

灰原「実際に」

軽井沢「ウケるな」

灰原「掴んだ手に力が入り過ぎて、先生が苦

しいって悶えて」

軽井沢「ウケないな……」

灰原「このままじゃ僕、少年ジャックを廃刊

に追い込む事件を起こすかもしれない」

軽井沢「全部聞かなかったことにしていい？」

灰原「廃刊かなあ」

軽井沢「(伝票持って)ここ奢るよ」

灰原「廃刊だな！」

軽井沢「わかったよ、わかったからオレを追

い詰めないで！」

## ○ 繁華街(夜)

灰原と軽井沢が歩いている。

軽井沢「お前のストレスを全て吹き飛ばした

るわ」

灰原、フラフラ歩く酔っ払いのオヤジを  
見て

灰原「まさか、オヤジ狩り!？」

軽井沢「なんで発想が暴力に向かうかな？

マンガの読み過ぎだよ」

灰原「それが仕事なんですけど」

軽井沢、「バンブルビーン」と書かれた看

板の前で止まる。

灰原「ガールズバー？」

軽井沢「お望み通り先生をメチャクチャにし  
てやるんだよ」

軽井沢、ニヤリ。

## ○ バンブルビーン(夜)

カウンター席が15個並ぶガールズバー。

客は入っておらず、女性店員5名ほど。

灰原と軽井沢が入ると

店員A「(軽井沢に)金剛先生！」

灰原「金剛？ まさか!？」

軽井沢「(小声で)まあ、そういうことだ」



灰原「これバレたら」

軽井沢「(店員たちに)今日は漫画家仲間の暗

木先生連れてきたから」

灰原「ちよっと!」

店員たち拍手。

軽井沢「楽しいぞ。先生ごっこ」

灰原「僕はしませんからね」

店員B「こちらへどうぞ」

### ○マンション・暗木の部屋・仕事場(夜)

暗木、発狂しながら執筆作業中。

### ○バンブルビーン(夜)

女性店員2人の前に座っている灰原と軽

井沢。

灰原「漫画ってのはさ、少年にとってのバイ

ブルだよ。だからエンターテイメントで

ありながら、大人になっても役立つ哲学で

なくてはならない」

店員A「さすが暗木先生」

灰原「狂四郎ちゃんって呼んで」

店員B「狂四郎ちゃん」

灰原「へへへ」

軽井沢「(小声で)お前飛ばしすぎ」

灰原「いいんすよ、実際にアイデア出してる  
の僕なんですから」

店のドアが開き

マコの声「お待ちどーさまー」

灰原「出前？」

入口の方を見ると、マコ(22)がいる。

店員A「マコちゃん、二時間遅刻」

マコ「いいじゃないですか、給料日前はお

客さん少ないんだから」

店員A「そういうことじゃないの」

マコ、コートを脱ぎながらカウンターへ。

すでに店のコスチュームを着ている。

店員B「持ち帰り禁止って言ってるでしょ」

マコ「狭い部屋で着替えるの嫌なんだもん」

店員A「まったく。(灰原に)暗木先生からも  
言っちゃってください」

マコ「え、カメレオンファイターの暗木狂四郎！？」

灰原「ええ、まあ」

マコ「私ファンなんです。最近主人公まで死んじゃったけど」

灰原「ガツカリだよね」

マコ「最高です！」

灰原「えっ？」

マコ「私飽きっぽいから展開早いのが好き」

灰原「そっか」

マコ「そうだ、本当にお説教してください」

灰原「急に言われても」

マコ「私、先生のお説教なら聞きたい」

軽井沢「オレのは？」

マコ「金剛先生の漫画はエッチなだけだからヤダ」

店員A「コラッ！」

マコ「暗木先生、はやくう」

灰原「えっと、もう大人なんだし、時間は守らないと」

マコ「つまんなーい」

店員B「マコちゃん」

マコ「サラリーマンのおじさんと同じこと言うんだね。本当に暗木先生？」

灰原「ほ、本物だよ」

マコ「もつと変な人って噂だけどなあ」

灰原、急いでイスの上に体育座りする。

軽井沢「(ボソッと)出た、暗木座り」

マコ「暗そう。やっぱおもしろい。ねえねえ、

なんで最近展開早いの？」

灰原「本当は連載終わらせたんだけど、担当が

無理矢理続けろって」

マコ「イヤなら辞めちゃえばいいじゃん」

灰原「簡単に言うなよ。担当だって本当は辞

めさせたいのに、頑張ってるんだ！」

マコ「へえ担当さんの肩持つんだ」

軽井沢「(耳打ちで)もう限界だ」

灰原「(耳打ちで)黙っててください」

マコ「好きで漫画家になったのに、どうして

辞めたいの？」

灰原「それは……理想と違ったからで……な  
んてワガママだよね」

マコ「わかる！ 私も理想と違ったら辞める」

灰原「これだから最近の子は」

マコ「先生だって同じでしょ」

灰原「そうだった。はい」

マコ「学生時代はさ、3年ずつくらいで環境  
変わるから耐えられるけど、会社に勤めた  
ら40年間同じ環境の可能性があるんでし  
よ。演じるの飽きちゃうよね」

灰原「演じる？」

マコ「私思うんだ。人間てさ、自分なんて無  
いんだよ。学生は学生を演じて、社会人は  
社会人を演じる。結婚したら夫を演じて、  
子供ができれば親を演じる。役割変えて退  
屈な人生やり過ぎすの」

灰原「そうなのか？」

マコ「絶対そうだよ。だから先生も漫画家演  
じるの辞めちゃえ！」

灰原「だけど、担当が」

マコ「担当さんもさ、入社した頃は仕事バリの自分の自分に酔ってたけど、そんな熱血な自分に飽きてるはずだよ」

灰原「確かに」

マコ「そこをついて説得すればいいんだよ」

軽井沢、立ち上がり

軽井沢「ちよいトイレ」

トイレに向かう軽井沢に店員Aが「ごめんね、変な子で」と近寄る。

軽井沢は「いいって」と言いながら苦笑。

灰原は軽井沢を見つめる。

マコ「ほっとけばいいよ。退屈を誤魔化して生きてる人たちなんて」

灰原「でもさ、僕の漫画を楽しみにしてる読者だっている。辞められないよ」

マコ「私も辞めてほしくないけどさ」

灰原「どうしたらモチベーション上がるかな」  
マコ「(ニヤリとし)新しい恋人つくるのは？」

灰原「恋人……か……」

マコ「新しい恋人にはカッコイイ自分を演じ

なきやいけない。そしたら仕事でもカツコ  
イイ自分でいられる」

灰原「そんなもんかな？」

マコ「新しい刺激が必要なんだよ。先生にも、  
その担当さんにも」

マコ、灰原の手を握る。

灰原、ソワソワした後、手を握り返す。

×

×

×

トイレから出てくる軽井沢。

軽井沢「あれ？」

灰原の姿はない。

店員A「出てゆきましたよ、マコちゃんと」

店員A、タメ息。

### ○ ラブホテル(夜)

シャワーの音とマコの鼻歌が聞こえる部  
屋。灰原は一人ベッドに座り、頭を抱え  
ている。

灰原「暗木狂四郎としてのセックス……。や  
っぱりダメだ」

着メロ、『僕たちの失敗』が流れる。

灰原、タメ息混じりで電話出て

灰原「もしもし、暗木先生？」

暗木の声「灰原さんは天国って信じますか？」

灰原「はい？」

暗木の声「お花畑の中、天使に囲まれて」

灰原「(さえぎり)漫画のことだけ考えてペン  
を動かしてください」

暗木の声「うわ、今一瞬で地獄の風景が」

灰原、電話切る。

灰原「絶対やったる」

タオルを巻いたマコがシャワーから出る。

灰原「僕もシャワー」

マコ「いいよ。おしゃべりしよ」

マコ、灰原の隣に座る。

マコ「すごいよね」

灰原「何が」

マコ「漫画家ってコンビニ行くの楽しそう」

灰原「コンビニ？」

マコ「この前ね、小学生の子たちがジャック



立ち読みしながら先生の漫画の話してたの」

灰原「そっか」

マコ「子供に夢与えられるって素敵」

灰原「そうかな」

マコ「だからラッキーなの」

灰原「ラッキー？」

マコ「誰も先生がこんな所にいるとは思ってないじゃん」

灰原、額の汗を袖で拭い

灰原「子供の夢傷つけたくないし、やっぱり今日は」

立ち上がろうとする灰原のふとももに  
手を置くマコ。

マコ「緊張してる？」

灰原「そういうんじゃないよ」

マコ「もしかして初めてとか」

灰原「どうだろう」

マコ「それは無いか。でもつまらない女として経験なさそう」

灰原「どういう女、それ」

マコ「優しくされるのが当たり前だと思って、何もしてくれない子、マグロ！」

灰原「それが普通でしょ」

マコ「私は違うよ」

灰原「あ、えっと……。実は童貞、そう童貞なんだ！ ひくでしょ？ だからやめよう」

マコ、灰原にキス。

マコ「寝てて」

灰原「ちよ」

マコ「何もしないでいいから横になっでて」

灰原「悪いよ」

灰原は押し倒され、マコに耳元で

マコ「ささやき）頑張らなくてもいいんだよ」

灰原「はふん」

マコ、胸に灰原の顔を埋めさせる。

マコ「いつも大変でしょ」

灰原「大変」

マコ「甘えていいよ。大人とか、男とか、演じなくてもいいから」

マコ、灰原の頭を撫でる。

マコ「はーいって、お返事は？」

灰原「はーい」

マコ「良い子、良い子、偉いね」

再び、『僕たちの失敗』の着メロ。

マコ「出ないの？」

灰原「うん」

マコ、自分の頭を灰原の腰のあたりに持つてゆく。

### ○マンション・暗木の部屋・仕事場(夜)

暗木、シュツシュツシュと、パソコン画面を見ながら鉛筆で女性を描いている。

パソコンの画面。「声優 真子田サトミ  
画像」の検索ワードの下、マコの画像の  
一覧が並んでいる。

暗木「(ニヤリと) 清纯のカタマリ」

完成した絵は白いワンピース姿のマコ。

### ○ラブホテル街(日かかって・明け方)

十字路でマコが立ち止まり

マコ「私、西武線だからここで」

灰原「あ、ああ。じゃあ」

歩き出した灰原の背中に向かって

マコ「担当者からも言われるといいね」

灰原、立ち止まる。

マコ「頑張らなくてもいいよって」

灰原「そんなこと言われたらやめたくなっち

やうでしょ」

マコ「きっと漫画続けたくなると思う」

灰原「なんで」

マコ「他人の台本の上に転がされてるってつ

まらないでしょ。だから」

灰原「よくわかんない」

マコ「言われればわかる。じゃあね」

マコは去ってゆく。

## ○ マッシュ・暗木の部屋・仕事場(日かわって)

イスの上に体育座りをして頭を抱えている暗木の横に、灰原が立っている。

暗木「限界です」

灰原「もう頑張らなくてもいいですよ」

暗木「もしかして打ち切り？」

灰原「順位下がってても、安全圏にはいます」

暗木「よ、よかった」

灰原「辞めたいんですね」

暗木「打ち切りはプライドが許さないんです」

灰原「他人に方向を決められるのは嫌だ」

暗木「申し訳ないけど、そうです」

灰原「(ボソツと) 意外と単純……」

暗木「へ、何か？」

灰原「いえいえ、集中、集中」

暗木、執筆作業を始める。

## ○ ラブホテル、暗木の仕事場、編集部のカット

### バック

ラブホテル。

ソファでマコに膝枕してもらっている灰原。  
原。

灰原「最近、モチベーション、うなぎ登り」

マコ「私アゲマンかも」

灰原「(笑い) そうかも」

× × ×

暗木の仕事場。

執筆中の暗木の横に立つ灰原。

灰原「ヒロインはもつと天真爛漫にした方がいいです。『私、アゲマンです！』みたいな」

暗木「僕みたいな人間が明るい子を描けるわけがないじゃないですか」

灰原「諦めたらそこで試合終了ですよ！」

× × ×

少年ジャック編集部。

壁には、折れ線グラフでまとめられた各漫画の順位の推移が貼り出されている。

『カメレオンファイター』の線は、下降してしまふ。

× × ×

ラブホテル。

ベッドの上で、テレビのマンザイを見ている灰原とマコ。

マコ、大笑い。

灰原「僕みたいな暗いやつ、暗い作品しか描けないんだ」

マコ『『アウトレンジ』だって、暴力すさまじいけど、笑えるシーンいっぱいあるじゃん』

× × ×

暗木の仕事場。

身振り手振りで説明している灰原を、暗木は啞然として見つめる。

灰原「北野武は言いました。暴力もイキきれば笑いに変わると。今まで通りダーティーな感じでいきましょう」

暗木「どんな感じ……でしょうか」

灰原「例えばヒロインの一族は、天狗と山伏の闘いに巻き込まれて滅んだとか」

× × ×

少年ジャック編集部。

『カメレオンファイター』の折れ線、上昇。

× × ×

ラブホテル。

灰原、すすり泣くマコの頭を撫でている。  
マコ「最近ストーリーがやけに暗いのは、私  
がウザイせいなの？」

灰原「泣かないでよ。オレも我慢して頑張っ  
てるんだから」

灰原、タメ息。

× × ×

暗木の仕事場。

灰原は偉そうに腕を組み、執筆中の暗木  
に向かって

灰原「もっと明るく！ 少年漫画なんだから」

暗木、涙を流しながら執筆。

灰原「水滴が原稿にこぼれる！」

暗木「すいません……」

それでも暗木は懸命に執筆。

× × ×

少年ジャック編集部。

『カメレオンファイター』の折れ線、急  
激に下降してしまう。



○ 講創社・少年ジャック編集部(日かわって)

鼻歌を歌いながらキーボードを叩く灰原に、軽井沢が歩み寄る。

軽井沢「何々？ 明るいやない」

灰原「先輩のおかげですよ」

軽井沢「付き合おうのを止めるつもりはないけど、線引きだけはキチツとしておけよ」

ど、線引きだけはキチツとしておけよ」

灰原「マコちゃんなら大丈夫ですよ」

軽井沢「あの子、何でもしゃべるって噂だぞ」

灰原「まさかあ」

軽井沢「気をつけてくださいよ。暗木先生」

一番奥の席にいる編集長が立ち上がり

編集長「おい灰原、話がある」

灰原「なんででしょうか」

編集長「ここじゃ言えん。あとで会議室来い」

軽井沢「ほらな」

灰原、額の脂汗を袖で拭う。

○ 同・会議室

広い部屋で、灰原と編集長が対座中。

灰原、頭を下げ

灰原「ごめんなさい。先謝っておきます」

編集長「そうだな。暗木先生の担当として責任は重く受け止めるべきだろうな」

灰原「クビですか」

編集長「まさか。掲載順位下がったってクビにはせんよ」

灰原「なんだ。(ボソッと)そっちなか」

編集長「なんだとはなんだ。カメレオンファイターのアニメ化の話も出てるのに」

灰原「ほんとですか？」

編集長「まだ口外はしないでくれよ」

灰原「もちろんです」

編集長「今のうちに掲載順位を上げるようにしてほしいのと、先生の行動に注意を払え」

灰原「そうですね」

編集長「あの人変わり者だろ。悪い噂でアニメ化がポシヤらないようにしてくれな」

灰原「は、はい」

編集長「真面目な君なら上手くできるだろ」

笑顔の裏で灰原の足がガタガタ震える。

### ○マンション・暗木の部屋・リビング

お茶を飲んでいる灰原と暗木。

灰原「(恐る恐る)先生はアニメ化なんてイヤですよね」

暗木「アニメ化？」

灰原「話が持ち上がってるだけです」

暗木、震える手で茶碗を机に置く。

灰原「アニメ化すると漫画もアニメを意識したストーリー展開になるから、先生の自由な発想が崩れるかもな」

暗木「頑張ってみようかな……」

灰原「む、無理しなくていいんですよ。メディアに露出する機会もあるかもしれないし、ほら、恋愛なんかも自由にできないかも」

暗木「童貞ですから！ 大丈夫！」

灰原「そ、そうですか……」

暗木、仕事場に移動し、デスクに腰を据える。

暗木「で、声優さんは僕が決めますか？」  
灰原「決定権は無いですが、オーディションに参加するぐらいなら」

暗木、鉢巻きを締め、執筆を始める。

灰原「暗木狂四郎はやはり童貞……」

灰原、タメ息。

## ○ 高級レストラン(夜)

うつむく灰原の前で、マコがワインをイ  
ツキに飲み干す。

マコ「今さら何言っちゃってるの」

灰原「別れた方がお互いのためというか」

マコ「ヤダ。別れるなら、今までのこと皆に  
言いふらすから」

灰原「ちょ、ちょ、やめてよ。ほら、僕童貞  
を貫いてるセルフブランディングを……」

マコ(大声で)私、この人に抱かれました！」

灰原、マコの口を塞ぐ。ザワつく周囲の  
客に頭を下げた後

灰原「わかった、別れないから」

灰原、胃の辺りを何度もさする。

### ○ マンション・暗木の部屋・仕事場(夜)

パソコンの前でニヤニヤする暗木。

暗木「真子田サトミちゃんをヒロインに……」

真子田サトミのファンサイトのトップ画  
に映るマコを見つめる。

暗木「そして結婚」

暗木、グフフと笑う。

### ○ 講創社・少年ジャック編集部(日かかって)

皆、立ち上がる編集長に注目。

編集長「……と、いうわけで、カメレオンフ

アイターのアニメ化が決定した」

皆、拍手。

灰原は「どうもどうも」とニコニコしながらも、額の汗を拭っている。

拍手が終わると、胃の辺りを抑えタメ息。

灰原の声「え、オーデイションの練習!？」

## ○マンション・暗木の部屋・仕事場

灰原と暗木が対座中。

暗木「堂々としていたいか、作家らしくしたいというか。声優さんとか、監督とか、声優さんをガツカリさせたくなくて」

灰原「声優さんばかりですね」

暗木、パソコン画面を灰原に見せる。

画面にはモデルの男。髪の毛はフワッとパーマ。細身のパンツとジャケットを羽織り、アクセントとしてスカーフを巻いて黒ブチメガネ。

灰原「漫画家というより、広告のクリエイターっぽくないですか？」

暗木「いいんです。クリエイターで」

灰原「背伸びしなくても。締め切り近いので、今は執筆に集中……」

暗木、原稿を渡してくる。

灰原「(めくり)完成？ 締め切り2日前ですよ」

暗木「頑張りました」

灰原、額の汗を袖で拭う。

暗木はその様子をジッと見つめている。

### ○ 美容室

灰原、待合席からパーマ中の暗木を見つめる。

### ○ アパレルショップ

試着室の前に灰原。

灰原「せんせー」

暗木の声「い、今すぐ」

試着室から出てきたスカーフ巻き暗木の

灰原の言うところの広告クリエイター風の格好。

### ○ 喫茶店

テーブル席で対座する灰原と暗木。

暗木は背筋がピンと伸び、ハキハキと

暗木『カメレオンに出てくるヒロインは主人公と対極にあって裏表が無さそうに見える

子なんだ。だから主人公の弱点を補えるし、  
心の支えにもなれる』

灰原「そう、その感じ。作家先生に見えてき  
ました」

暗木「そ、そうですか」

暗木、猫背でモジモジしだす。

灰原「さっきの状態を習慣づけてください」

暗木「無理ですよ。素の状態ではないので」

灰原「漫画家暗木狂四郎を演じるんです」

暗木「演じる……か……」

灰原「演じてるうちにその状態が素になりま  
すから」

暗木、髪をいじりながらマドラーでコー

ヒーをグルグル。

灰原「あの感じなら、僕が担当じゃなくても  
大丈夫ですよね」

暗木のマドラー、ピタリと止まる。

灰原「先生には独自の世界観があるわけだし。  
僕のような口うるさい編集は足を引っ張る  
と思うんです」



暗木 「そんなこと、ありません」

灰原 「本当に引っ張るかもしれないんです！」

暗木、ラッピングされた箱を出し、灰原に渡す。

暗木 「さっきスキを見て買いました」

灰原 「これは」

暗木 「プレゼント。ハンカチです」

灰原 「なぜ」

暗木 「いつも額に汗を浮かべているから」

灰原 「そうじゃなくて、なぜ僕なんかに」

暗木 「灰原さんが辞めるなって言い続けてくれたからアニメ化されるんです。僕の描くダーティーな漫画は映像化されないと思ってた。嬉しくて」

灰原は涙をポロポロ。

灰原 「僕なんて、本当にダメな編集で」

暗木 「今後ともよろしくお願いします」

灰原、早速ハンカチで涙を拭う。

## ○ ラブホテル(夜)

掛け布団の中に灰原とマコ。

マコ「ねえ先生。お願いがあるの」

灰原「先生と呼ばないでくれるか」

マコ「じゃあなんて」

灰原「本名は……」

マコ「言わないで。暗木狂四郎の恋人つてのが楽しいんだから」

灰原「それは演じる楽しさ？」

マコ「どっちでしょう」

灰原、マコに背を向ける。

マコ「ねえ、お願いを聞いてよ。私ガールズ

バーでバイトしてるけど、本業は……」

灰原「(遮り) 聞かない!」

マコ「ケチ」

布団の中、灰原はハンカチを握りしめ、  
見つめる。

## ○アニメーションスタジオ・外観(日かwatて)

西武線沿線にある木々に囲まれた大きな  
スタジオ。

○ 同・廊下

灰原と暗木、並んで歩いている。

灰原「さわやかにハキハキとですよ」

暗木「さわやかな笑顔で」ハイ！」

灰原「そう、それです。何か聞かれたら遠慮なく自分の意見を述べてください」

○ 同・レスンスルーム(オーディション会場)

ヘッドホンを首にかけた灰原と暗木、スタッフ5名と長机に横並びで着座中。

灰原は額の汗を拭い、うつむいている。

液晶モニターとスタンドマイクの前には

真子田サトミこと、マコが立っている。

マコ、灰原に小さく手を振る。

灰原「(ボソッと)なぜだ……」

マコ「エントリーナンバー25番、真子田サトミです」

P 「プロデューサーの田中です。今回審査委員長的な役割なのが音響監督の湯浅さん」

音響「(ペコリとして)どうも」

P 「で、その隣が……」

作画監督などがプロデューサーから紹介され、本人が頭を下げる。もうすぐ暗木の番。焦る灰原は暗木に耳打ちして

灰原「絶対頭を下げないでください」

暗木「なぜ？」

灰原「その方が堂々と見えるんです」

P 「そして原作者の暗木狂四郎先生です」  
なぜか灰原が頭を下げ、皆啞然として一瞬沈黙に包まれる。

P 「で、担当編集の灰原さん」

灰原、暗木の頭を掴み、ペコリとさせる。

暗木「(思わず)ど、どうも」

P 「で、では。台本の15ページ3行目『大変！ 山伏たちがせめてくる』から16ページ『天狗、山伏、私たちの三つ巴。負けられない、絶対！』までをお願いします」  
マコ「はい！」

プロデューサー、リモコンでモニターを

再生。カラーがまだついてないカメレオンファイターのアニメーションが流れる。皆、ヘッドホンを装着。

マコが台本を読み始める。

その隙に、暗木が灰原に耳打ちして

暗木「僕が灰原さんで、灰原さんが僕みたいになってたじゃないですか」

灰原「何が？」

暗木「挨拶逆だったでしょ。なぜ？」

灰原「ほ、ほら、お互いがお互いを紹介してチームワークの良さのアピール。うん」

暗木「なるほど」

マコ『天狗、山伏、私たちの三つ巴。負けられない、絶対！』

P 「OKです。湯浅さんどうですか？」

音響「ここはもっと感情込めてほしいよね。

ヒロインの一族は天狗の鼻に貫かれて滅ぼされたわけだし。ですよ、先生」

暗木「えっと……」

灰原「(さえぎり)そうですね！ この後天狗

の鼻を切り落としたヒロインが復讐の虚しさを痛感するわけだから、ここは激しく。

緩急つけてもらいたいですね」

音響「なぜ、灰……」

灰原「(さえぎり)以上がチーム暗木の総意です」

音響「そ、そうですか。では三つ巴の部分をもう一度」

マコ「(熱烈に)『天狗、山伏、私たちの三つ巴。負けられない、絶対!』」

P「以上でよろしいですか?」

音響「自分は構いません」

P「では真子田さんから質問やご意見はありますか?」

マコ「では……」

灰原、額の汗を拭い、脚をガタガタ。

マコ「(ニヤツとし)暗木先生に質問が」

灰原・暗木「はい!」

また室内は沈黙。

マコ「なぜヒロインは天狗に滅ぼされた一族

の末裔であることを隠してまで復讐を果たせたのに虚しさを感じるのですか？」

灰原「(暗木をさし)では回答は彼から」

暗木「あー、えっと……。ヒロインは主人公を騙していたわけで。恋をした相手にウソをついてまで目的を果たしたわけですよね」

マコ「そうですね」

暗木「真子田さんなら心は痛みませんか？」

マコ「全然。私は演じるために生まれてきたので、その気持ちだけは理解できません。

その他は全て共感できません！」

暗木「そうですね……」

P 「ではオーデイションは以上です」

## ○ 同・廊下

灰原、レッスルームから飛び出す。

胃の辺りをさすりながら、男子トイレに駆け込んでゆく。

その様子を、マコが目撃。

## ○ 同・男子トイレ

個室内。

灰原、「オエッ」と胃液を便器に吐き出し、  
個室から出る。

と、マコが立っている。

マコ「せんせっ」

灰原、「うわっ」と、その場で尻もち。

マコ「私どうしてもヒロインやりたいな」

灰原「そ、それは……」

マコ「ねえお願い。原作者なんだからそのく  
らいのワガママ言えるでしょ。暗木先生」

マコ、灰原に手を差し伸べる。

## ○ アニメーションスタジオ前

スタジオから出てくる灰原と暗木。

暗木「実はあの中にお気に入りの声優さんが  
いたんです」

灰原「ど、どの子？」

暗木「エントリーナンバー25の真子田さん」

灰原「(ホッと)そうですか。僕も彼女が適任



かなって……」

暗木「けど、スタッフの皆さんが懸命になってくれてるのに、僕の一存で御指名なんて」

灰原「何言ってるんです、先生の作品でしょ」

暗木「イメージと違っただんです」

灰原「へ？」

暗木「彼女よりエントリーナンバー12の子の方が適任だと思うんです」

灰原「お気に入りなら近づくチャンスですよ」

暗木「実際会ったらそこまで惹かれなかった」

灰原「そんな」

暗木「理想と現実って違いますね」

灰原の声「マコちゃんゴメン……」

### ○ 講創社・少年ジャック編集部(夜)

灰原以外はいない薄暗い室内。

ノートパソコンでメールを打ち込みながら通話中の灰原。

灰原「僕の一存では決められないみたいで」

メールの文面、「暗木先生の希望はエント

リーナンバー12の」まで打ち込まれる。

マコの声「気にしないで。先生は悪くない。

むしろ私のために頑張ってくれたんでしょ」

打ち込む手が止まり

灰原「ああ……うん……」

マコの声「本当にありがとう」

灰原、「ナンバー12の」をデリート。

マコの声「ただ先生の頑張りに報いるために

も、私も頑張りたい」

灰原「はい？」

マコの声「先生のこと演技でなく本気で好き

だから……」

### ○アパート・マコの部屋(夜)

ノートパソコンの前で通話中のマコ。

マコ「好きだから自分でスタッフの人にア

ピールする」

灰原の声「アピールって……」

マコ「会わせてよ。チーム暗木のもう一人の

人に」

灰原の声「無理だと思っうなあ……」

マコ「私世の中で信頼できる人、先生しかないの」

灰原の声「わかったよ……頑張ってみる」

マコ「大好き」

パソコンの画面。検索ワード覧には「暗木狂四郎 画像」と記載されている。

その下、隠し撮りらしき暗木本人が写っている画像。

マコ「(電話切り) やっぱ偽者だったか」

### ○マンション・暗木の部屋・仕事場(日かかって)

執筆中の暗木の横に、灰原が座っている。

灰原「先生のわがままなら通ると思うんです」

暗木「真子田さん、学生時代に僕のことキモいと言ってた女子に雰囲気似てると思った」

灰原「ちゃんと話してみれば印象も変わりますって」

暗木「それもそうですね」

灰原「え？ いいんですか？」

暗木「灰原さんのこと信じてついてきたから  
アニメ化してもらえます。お会いし  
てみます」

灰原、ニコニコしながらも額の汗を拭う。

### ○ 講創社・会議室（日かわって）

ジャック編集部員たちが着席中。

編集長「新連載は以上の二作。連載終了は金

剛先生のラブリーパンティの一作」

皆、ザワつき、軽井沢を見る。

軽井沢「打ち切りではないんだ。半年以上前  
から最終回を迎える予定だった」

編集長「でだ。ラブリーパンティ終了と同時に  
に、担当の軽井沢は総務部に異動する」

ザワつきが余計に大きくなる。

### ○ 健康ランド・サウナ内

灰原と軽井沢が並んで座っている。

軽井沢「これが一番のリフレッシュだな」

灰原「ガールズバーの前に紹介してほしかっ

たです」

軽井沢「一緒にサウナはイヤでさ」

軽井沢、腰に巻いていたタオルを取り

軽井沢「キレイだろ？」

灰原「な、なぜ見せるんですか？」

軽井沢「そこじゃねえよ。脚見る、脚」

軽井沢の脚、毛が生えておらずツルツル。

灰原「たしかにキレイだ」

## ○ 同・更衣室

軽井沢、カバンをひっくり返す。

中からスカートやパンティが出てくる。

灰原「ちよっと！」

灰原、スカートなどを拾い集める。

周りを見ると他に客は無くホッとタメ息。

灰原「いやいやいや急に性癖を暴露されても」

軽井沢「ちげえ。金剛先生に着せられてんの」

灰原「(キレイな脚を見て)パンチラのモデル」

軽井沢「そう。情けねえだろ、嫁さんも娘も

いる男が」

灰原「立派ですよ」

軽井沢「無理すんなって」

軽井沢と灰原、腰かけに座る。

灰原「本当にすごいなって思いますよ。先輩の頑張り」

軽井沢「なんか急に虚しくなってさ」

灰原「てつきり先輩は編集長狙ってると思っ  
てました」

軽井沢「そんな時代もあったねー」

灰原「過去形……」

軽井沢「うち、嫁さんと共働きだろ」

灰原「はい」

軽井沢「娘保育園に預けてんだけど、急に熱  
出した日があつて。嫁さん出張で、迎えに  
行けたの夜の10時」

灰原「しようがないでしょ」

軽井沢「保育園から連絡受けた時にオレ、金  
剛先生の事務所でスカート履いてた」

灰原「それも一、二カ月の辛抱です。金剛先  
生以外なら」

軽井沢 「スカートは引き金ってだけ。会社でも先生にも良い顔して、家では嫁さんとケンカ。泣く娘に怒鳴ったこともある。手だって……」

灰原 「すみません、僕ばかり愚痴言っつて」

軽井沢 「先輩だもの、聞きますよ」

灰原 「これからは僕も愚痴聞きます」

軽井沢 「もういいんだ。オレは編集より父親の役割を優先した」

灰原 「役割……マコちゃんが言ったこと気にしてます？」

軽井沢 「とても。すげえイラついたよ。何も抱えてないクセに人生ナメやがってっつて」

灰原 「ですよね」

軽井沢 「いつからだろうな。オレも頑張ってるんだからお前も頑張れ！ が、誰にでも通用しなくなったのは」

軽井沢、ズボンを履く。

軽井沢 「家族とか会社背負うのは義務みたいなままなのにミスマッチだよ、ほんと」

○ 駅前(日かわって・夜)

灰原、颯爽と歩いている。

軽井沢の声「色々グチッたけど、金剛先生のことは尊敬してる。問題はオレ自身。自分のことより編集の仕事を愛せていたら、スカート履かされた話でガールズバーの子たちを笑わせてたかもしれないな」

売店の前、小学生がジャックを購入している。

灰原は思わず立ち止まる。

軽井沢の声「倍率200倍の面接を通って編集になれたのに。先生ごっこをしたオレは少年漫画を読み過ぎたのかな」

灰原の声「なんで少年漫画が？」

軽井沢の声「先生ごっこは刺激を求めた冒険だったからさ」

小学生を眺めていた灰原、歩き出す。

軽井沢の声「冒険してうまくいくヤツなんて

……」



駅前に立つ暗木を見つけ、灰原は駆け寄る。

ジッと暗木の指、ペンダコを見つめる。

暗木「ど、どうしました？」

灰原「いやなんでも」

2人は歩き出す。が、灰原立ち止まり

灰原「先生、大切なお話があります」

### ○ オシャレな居酒屋・個室(夜)

カクテルを飲んでいるマコの個室に灰原が一人で入ってゆく。

マコ「暗木先生、遅いよー」

灰原「先生は原稿の執筆のため来れません」

マコ「何言っちゃってんの？ 先生は先生でしよ。わかった漫画でよくある二重人格って設定だ」

無表情なままの灰原を見て、マコの笑顔がスツと消える。

灰原「先日のオーデイション、ご参加いただきありがとうございますました」

灰原、ケータイを裏返しでテーブルに置きつつ、座る。

灰原「(名刺出し) 改めてご挨拶を。暗木の担当編集の灰原洋二郎です」

マコは手を叩いて笑う。

マコ「今さらウソをつき続けるのが怖くなっちゃったわけ？」

灰原「先に御礼をさせていただきます」

マコ「は？」

灰原「マコさんが先生ごっこに付き合ってくれたおかげで、先生の気持ちが変わるようになりました」

マコ「不祥事の正当化？ ウケるー」

マコ、カクテルを灰原にぶっかける。

マコ「ウケねえよ。こっちはアニメ化見越して取り入ってきたんだよ。テメエの下らねえウソに付き合ってきたんだよ」

灰原「お互い目的達成のために頑張ってきたんだすね」

マコ「一緒にしてんじゃねえよ。テメエの先

生ごっこはストレスのはけ口だろうが」

灰原「そう思うのなら公表しても構いません。

『アニメ化を見越して取り入る』でしたっ

け？ お互いメリットはありませんが」

灰原、裏返しにしていたケータイを表に

する。録音アプリが起動されている。

灰原はケータイに付着した水滴を拭き

灰原「よかった。ちゃんと録音されてる」

マコ「別に、共倒れでも構わないけど！」

灰原、カバンの中から「辞表」と書かれた封筒を出して見せ

灰原「僕も同じ気持ちです」

マコ「自分で種まいたクセに、責任とってヒ

ーロー気取りかよ」

灰原「真子田サトミさん。現場への遅刻はゼ

ロ。仕事は選ばず、気配り上手。事務所の

方に伺いました」

マコ「脅してるつもり？」

灰原「選考の判断材料だったので」

マコ「ガールズバーの私と大違いで笑えるで

しよ」

マコ、新品のタバコを出す。

灰原「タバコ、吸ってたんですね」

マコ「声優になるって決めた日から今まで吸ってなかった」

灰原「なぜ今」

マコ「ヒロインの役をもらえなかったら5年ぶりに吸おうと思ってたの」

灰原「では高校時代から。ヤンチャだったんですね、結構」

マコ「けっこう優等生だったんだよ。だからタバコとかイジメがバレたらどうなるだろうってドキドキしてた」

灰原「自滅願望？」

マコ「大学の推薦蹴って声優になりたいって言ったらどうなるだろう。清純派の声優なのにガールズバーのバイトとか、枕営業みたいな行為がバレたらどうなるだろう」

マコ、タバコを出してくわえる。

マコ「5年間続けてきた自分との約束を破っ

たらどうなるだろう」

マコがライターを手に取ると

灰原「今から僕が話すことを聞いたらタバコに火をつけないと思います」

マコ「アンタの言葉に踊らされるわけないでしょ」

灰原「ヒロインになれるかもしれません」

マコ「え？」

灰原「先生、真子田さんがヒロインじゃないとアニメ化に反対してくれるそうです」

マコ、カチカチとライターの火を点けたり消したり。結局タバコに火をつけられず、ライターを床に叩きつける。

灰原「与えられた役割を一生懸命演じてください」

マコ、嗚咽を漏らし、涙をポロポロとこぼす。

## ○ 駅・ホーム(夜)

アナウンス「急行電車が通過致します。黄色

い線の内側でお待ちください」

ベンチに座っている灰原、「辞表」の封筒から三つ折りの紙を取り出し、広げる。

それはただの白紙である。

軽井沢の声「冒険してうまくいくヤツなんて、漫画の主人公くらいのもんだよ」

灰原、白紙をクシヤクシヤに握り、むせび泣く。

通過する電車が灰原の泣き声を消し去ってゆく。

## ○マンション・暗木の部屋・仕事場(夜)

灰原、ベタ塗りやトーン貼りをしている。

その横に立つ暗木。

暗木「もういいですよ」

それでも黙々と作業を続ける灰原。

暗木「いいですって！ そんなことをしても許せませんから、一生」

灰原、床に膝をついて土下座。

暗木「演じ続けて下さい。優秀な担当編集を」

灰原、身体を震わせる。

暗木は執筆作業を始める。

暗木「僕も漫画家を演じ続けます。逃がしません。宇宙の果てでも、地獄の果てでも」

灰原、執筆中の暗木の横に立ち、腕を組む。震える身体を堂々と見せる。

### ○ 講創社・外観（日かわって）

リクルートスーツを着た就活生たちが、「説明会、ご参加の方はこちらへ」と叫ぶ社員についてゆく。

### ○ 同・大ホール

社員2名対就活生8名ほどのブースが8つほど特設されたホール内。

人事部社員「では隣のブースへ移動を」

灰原と軽井沢が対応していた就活生たちが御礼を言い隣のブースへ。

軽井沢「でも就活生ってのはアレだな。面接でもないのに顔覚えてもらおうと必死でウ

ケるー」

灰原「僕らもこうだったんですよ」

軽井沢「オレは違うよ」

隣のブースの就活生たちが移動してくる。

軽井沢「さ、夢のある話でもしてやろうぜ」

「失礼します」と学生たちが二人の前に  
座る。

軽井沢「こんにちは。それじゃ質問ある人」

学生「(手をあげ)は、はい」

軽井沢「どうぞ」

学生「佐川美術大学の藤本です。えっと……」

軽井沢「リラックス、リラックス」

学生「お二人は漫画家と編集者、どっちが楽

しいと思いますか」

軽井沢「(苦笑い)そんなこと聞かれてもねえ」

学生「自分、昔から漫画家目指してて。正直、

就職するべきかもまだ迷ってて……」

一同、沈黙。

灰原「どちらも過酷です」

学生「ですよね」



灰原「幸い僕は好きなことに携わる仕事に就けましたが、趣味を一つ失ったとも思っています。だからと言って新しい趣味に没頭できるほど時間が豊富にあるとは言えません。憧れだけで志望するのは、出版業界のみならずおススメできません」

軽井沢「このお兄さんシビアだねえ」

就活生たち愛想笑い。

灰原「でも、ここで働いていなければ憧れを持ったままだったと思います。隣の芝生は青いと思わなかっただけでも良かったなあと思っています」

灰原はうつすらと微笑む。

## ○ 住宅地(夕)

歩いている灰原。メガネの少年が、ランドセルを背負った3人の子供に暴力を振るわれている。

ランドセル1「カメレオンボンクラッシュユ」  
等と、メガネの少年はパンチされたり転

ばせられたり。

灰原、子供たちに駆け寄る。

ランドセル2「逃げる！ 山伏が来るぞ！」

ランドセルの少年たちは逃げてゆく。

灰原はメガネの少年を起こしてやる。

メガネ「ありがと」

灰原「辛かったら親とかに相談しな」

メガネ「いいの。カメレオンファイターはね、

ウソはついても涙は見せないんだ」

メガネの少年、ニツと笑うと歩き始める。

とぼとぼと歩くメガネの少年の背中を見

つめる灰原。少年は涙を拭っている模様。

プルルル……と、普通の着信音が鳴る。

灰原「(電話出て)もしもし。またですか暗木

先生」

灰原は歩き出す。

灰原「(通話)いいですか、カメレオンファイ

ター以外のキャラがボスを倒すのはダメで

す」

メガネの少年、振り返る。

メガネ「カメレオン……」

少年は灰原の背中をジッと見つめている。

メガネ「スゴイ人見つけ！」

少年は「カメレオンダッシュ」と叫びな

がら、笑顔で走り出す。

〈F i n〉